



# ピッポ新聞

2011

6

No.258

## 子どもの本専門店 ピッポ

### ピッポ古書クラブ

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

山里からの便り 佐久間雅哉

ちいさな山里について

この春思ふこと

春と言えば命が芽生え、希望を胸に歩き出す。そんな季節なのに、今年ほとんどでもない事になりました。万を超える命が一瞬のうちに奪われ、田は塩まみれ、大地は放射能に犯され、言葉を失い、流す涙も枯れ、途方にくれる日本です。

でも、明治に遡る日本人のこれまでの来し方、政治、経済、科学、生活、およそあらゆるものを根底から再検証して、新しい行き方を見つける出発点にする為に、辛いけどやっぱり、この春を受け入れなければいけないでしょう。

私は7年前に「自然との関わりから生まれた技術と文化の再発見」をコンセプトに、自然体験活動をする、森林工房セブリ舎ネイチャースクールを始めました。今あらためてこのコンセプトを噛み締めています。

私は山村生活と林業技術からヒントを得てプログラムを作ります。木の倒し方、育て方。山の歩き方や見方。火や水の使い方。作物の作り方や保存の仕方。祭りや習慣も参考にします。これらは皆、この土地の人が受け継いできた自然との関わりの中から生まれた技術と文化です。

第一次産業という言い方は、自然に対して先ず第一次的だからこういふのでしょうか。二次、三

次とどんどん自然から離れていきますね。離れると同時に技術革新があつて、便利になり、人間社会中心になります。便利で快適な生活になるのは良いのですが、自然から離れて行くうちに元々の事を忘れてしまったようです。二十五年前にここに引っ越してきた私にとって、山村と林業は元々の事を教えてくれるものでした。

「自然との関わり」は良い事ばかりじゃありません。悪い事もある。恩恵と恐怖の中で反省し、工夫し、発見したりしてやってきたのです。昔の人にとって、資源は天然のものしか有りませんでした。理屈も知りませんでした。だからきつと、よく観察したんだと思います。

何が自分たちにとって有用か危険かを見て、聞いて、触って、匂いを嗅いで、どうしてかな？と考えたのでしょうか。観察、疑問、体験、理解というサイクルを繰り返して今に至るわけです。ところがある時期から、この一連の作業が疎かになり始めました。

高度経済成長期あたりでしょうか。みんな必死に働きました。どんどん経済は良くなって、便利になって生活基盤が整ってくると、敢えて自ら観察しなくても、疑問を持たなくても、工夫しなくても成果が見られるので、なんか納得しちゃうんですね。その納得を理解と履き違えてしまいながら、とうとう高度経済成長を達成します。あの一連の作業はこうして人々の中から消えてしまった。これが私のひとつの振り返りです。

こういふ中で自然は人々にどう思われて来たのでしょうか。自然の存在は段々と脅威ではな

く、恩恵の部分だけが印象付けられたよう  
です。人々はレジャーの対象とか、癒しと  
か、良い面しか見なくなってしまう。他  
所での被害は対岸の火事。そんな時に今回  
の大震災です。

「自然への回帰」とか「自然と共に」  
「地球に優しい生活」と言う言葉をよく耳  
にしますが、どうも腑に落ちない。自然が  
フレンドリーとは思えないし、自然に帰るつ  
て、縄文時代に戻って意味じゃ無いだろ  
うし、なんか納得しちゃうってるイメージ先  
行の言葉に思えます。

自然生態系の中で生きている人間以外の  
生物は、ただただ自らやるべきことをやっ  
ているだけだし、自然界で起きる事は、自  
ずからなる展開を成しているだけで、人間  
の事は何にも思ってくれていません。いく  
ら人間が放射能を撒き散らかしたところで、  
困ったと思うわけでも無いし、仕返しする  
わけでも無い。その放射能を受け入れるだ  
けです。困るのはひとり人間だけ。自分で  
首を絞めるばかりか、子孫にまでリスクを  
負わせるだけで。

## 「自然と向き合う」こと

私たちが出来るのは「自然と向き合う」  
事しかないような気がします。昔の人達が  
してきたように「学ぶ」しかありません。  
「自然から学ぶ」。何を何の為に？今現在  
の私たちの幸せの為にではなく、次世代の  
人達の幸せの為に「生活の仕方」を学ぶの  
だと思えます。次世代の人達の幸せを思う

ことが、今居る自分達の使命であり、幸せ  
と思えるようになったら良いなと思えます。

これは夢物語でも理想論でもありません。  
林業という産業が実はもう実践しているん  
です。他の産業と林業が大きく違つのは、  
今投資したものが自分に帰ってこないとい  
るにあります。今日植えたヒノキは、五十  
年経たないとお金にならないのです。今日  
生活していられるのは先代の人達が植えて  
くれた木が、今になってお金になつてい  
からなんです。こんな気の長い商売つてあ  
りますか。今日植えたヒノキは子や孫の世  
代で利益になるんです。ラーメン屋は労働  
と時間を投資してラーメンを作り、出して  
二十分もすればお金が入ってくるのに、林  
業は五十年ですよ。世代の繋がりの中で成  
立する産業なので、工業社会の市場経済原  
理には弱い立場なんです。

「木材成金」と言う言葉があります。確か  
に過去には急に木材が売れた時期がありま  
したが、あだ花だったと見たほうがよいで  
しょう。その頃は急な需要に対応できる労  
働力があつたし、流通形態も見合うもので  
した。今は労働力は激減、加工と流通形態  
も激変しているので無理でしょう。林業が  
成立するにはそれなりの時間が必要で、今  
の工業的な時間には追いつけません。それ  
でも、私が知り合つた林業会社の社長達、  
そこで働く若者達は、経済的に厳しくても、  
自分たちが森を育て守らなくては、土砂流  
出の防止、水の安定供給ができなくなり下  
流域に被害が及ぶ事を知っていて、誇りを  
持ってやっています。

元々の事を教えてくれた山村と林業の話  
してききましたが、「幸せ」の元々も学べる  
ような気がします。コマージュルじゃあり  
ませんが「幸せてなんだつけ、なんだつ  
け」です。経済的に豊かで無いと幸せには  
なれないのでしょうか。今回の原子力発電  
事故を伴う大震災の被害から学ぶものは多  
いはずですが。宮沢賢治も言っているではな  
いのですか。「よく見聞きし、分かり、そし  
て忘れず。」

## 福音館書店から 「フェリクス・ホフマン」 の復刊絵本4冊

スイスの絵本作家ホフマンの描くグリム  
童話の世界は、空間や背景を含めてわた  
たちの想像力を拡げ、グリムの持つてい  
る普遍的世界をわたしたちに届けてくれる  
すぐれた絵本です。特に「おおかみと七ひき  
のこやぎ」や「ねむりひめ」（いずれも瀬  
田貞二・訳）は、出版以来40年以上経ちま  
すが、いまだ多くの読者から支持を得てい  
ます。そのホフマンの生誕100年を記念  
して、グリムの絵本が4点福音館から復刊  
されました。

『ながいかみのラプンツェル』（せたてい  
じ・訳 1365円）  
魔女との約束を破った貧しい夫婦は、生ま



「七わのからす」（せたていじ・訳 1365円）  
7人の男ばかりの兄弟の家に女の子が生まれました。女の子は体が弱かったので洗礼を受けさせようと父は、兄弟に泉に水を汲みに行くように頼みました。ところが兄弟は自分が水を汲むと争って坪を泉の底に沈めてしまいました。

れた娘ラプンツェルを取りあげられてしまいました。魔女は森の高い塔の中に閉じこめ人の目から隠してラプンツェルを育てました。ある日ラプンツェルの美しい歌声を聞いた王子に魅せられて・



父は役立たずの息子たちを怒って「みんなからすにでもなっちまえ」と呪いの言葉を唱えてしまったのです。カラスにかえられた息子たちは何処かえ飛び去ってしまいました。無事成長したすえの妹は兄たちのことを知って一人兄たちを捜しに旅に出ます・

「うできき四人きょうだい」（寺岡寿子・訳 1365円）  
貧しい父は四人の兄弟を何か技術を身につけるように旅に出します。道が四つに絵分かれているところまで来ると4年後の再開を約してそれぞれ別の道を進みました。1番目は泥棒に会いその技術を身につけました。2番目は星



見に出会いそれを習得し、何でも見える望遠鏡を授かります。3番目は猟師に出会い腕利きの猟師になりました。4番目は仕立て職人に出会い何でも縫える技術を身につけました。4年後そろって家に帰ります。そうこうするうちに、国のお姫さまが龍にさらわれ、王さまは姫を助けたら姫をやるとふれを出しました。そこで4人兄弟は救出に向かいます・

「しあわせハンス」（せたていじ・訳 1365円）  
奉公を終えたハンスは主人から、給料として大きな金のかたまりを貰いました。帰る途中馬に乗った男と出会い馬と金を交換しました。馬乗っているとから落馬し、ちよ



と出会いこんどは馬と牛を交換します。つぎつぎ出会った男と交換するハンスはとうとう交換した砥石泉の底に落としてしまいます。さてハンスのしあわせって何だろう？

ねー、この本よんだ？



「カエルの目だま」（日高敏隆・文 大野八生・絵 1365円 福音館書店）  
池に住むカエルが自分の目だまの自慢をはじめると、そこにギンヤンマが飛んできて、自分の複眼こそがすぐれていると主張する。おつとまつたこととミスマシ、

ぼくの目こそ地上と水中を見ることができるところから一番だと大いばり・。ユウモアあるかいわのなかで、それぞれの生き物

の目だまがその生き物にとって一番適していることがよく分かる。

『なぞなぞおめでとう』（石津ちひろ・なぞなぞ スズキコージ・絵 1050円 偕成社）



1「ほらごらん ひかりかがやく あかるいほうきとおくの そらをとんでいる さて いったいなあに？」

めたら もうかけない さて、いったいなあに？」

なぞなぞやことばあそびの面白さに定評のある石津さんの50コのなぞなぞと、スズキコージさんのユーモアあふれる絵で綴るなぞなぞ絵本。コージさんの絵の中に答えが描かれているから。分からないときは絵をじっくり探すと答えが見つかるよ。

『落語えほん しまめぐり』（桂文我・文ズスキコージ・絵 1575円 ブロンズ新社）

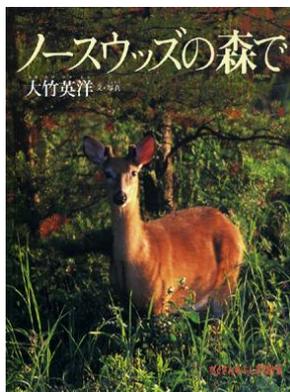
上方落語を文我さんが絵本にしたもの。江戸から明治のはじめ西洋から伝わった話をもとに、話を作り、人々はそれを様々に

楽しんでさうです。この絵本の話はガリバーなんか元になっているのかもしれないね。



も東洋でも奇想天外の話は大好きです。

『ノースウツズの森で』（大竹英洋・文・写真 1365円 福音館書店）



著者は、アメリカの北部ノースウツズの森に魅せられて観察を始めてます。そこは針葉樹林にシラカバなどの広葉樹が混ざり、氷河が遺した多くの

湖がある豊かな自然がひろがっています。冬には氷点下50度にもなる地でもありません。子鹿や、ライチョウの親子など、豊かな自然の中で暮らす動物たちとの出会いに、著者の喜びや緊張が伝わってきます。冬のオーロラの観察なども圧巻です。

### 古書あれこれ その3 ある日の市場で

最近「古書の市場」の出品が、事前にネットでチェックできることが多い。実際は目録に掲載されている点数はほんの一部であり、その十数倍が出品されるのだ。でも出品者に見れば自信のものや、どうしても売りたい物を目録に載せるだろうから、その「市」の傾向は買い手にはも分かるのだ。

先日、目録を見て田島征三さんの「カマキリ」という油彩画が出品されていた。さらに初山滋の画稿が10枚二つの額にかざられているもの、さらにミヒヤエル・エンデのエッチングと直筆のペン画が出品されている。エンデのお父さんは確か画家だったけれど、エンデ自身も絵を描くのだろうか？これは東京まで出かけずばなるまい。

こちらの予想していたように、初山滋とエンデの物は応札者が多くて、封筒には札が一杯だ。田島さんの絵はいりの方は、応札者はいるが余り多くない。これはひょっとしたら落札できるかもしれない思ったのだ。締め切り時間がせまって、ぼくは悩んだ！さつきから入札者がふえるようすもない、しかし、せっかく静岡からきて何も落札できなかったら車賃が損だし、もっと高値の改め札を入れようかな？でもな、古本屋で絵本作家田島征三を知っている奴がどれだけいるというのか？えーい、ここはそのまま最初の内札を押し通そう。結果はなんと落札できたのである。それも下の価額での落札だった。静岡からきてよかった！